1990年10月30日

ペシャワール会報

No.25

●ペシャワールの風土と会の現地活動の軌跡　中村　哲

●新会則のもと新たな出発を　佐藤雄二

●私の貧しい能力において最大限に役立てるところで生きてみたい　吉武英子

●マザー・テレサと中村医師に触発されてペシャワールへ　藤田千代子

●荒削りの優しさのなかで　沢田裕子

●DR. & MRS. UJAGER ENJOYED THEIR VISIT TO JAPAN

＊表紙画　甲斐大策

ペシャワール会　〒810　福岡市中央区大名一丁目一〇一二五　上村第二ビル三〇七号
電話・FAX　〇九二（七三一）二三七二

ペシャワール会は1983年９月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

ペシャワールの風土と会の現地活動の軌跡〔1〕

――ペシャワールにおける会の働きの理解のために――

中村　哲

結成から七年を迎えたペシャワール会は、多くの医療・事務関係者をボランティアとして送りだすと共に、ペシャワールの現地プロジェクトそのものを長期的に支えるユニークな民間国際協力団体として成長してきた。この活動を通して我々は日本の良心を束ね、アジア理解を深める場を提供している。

ここで現地事情の一端を紹介すると同時に、今一度ペシャワール会の現地活動の軌跡をふりかえり、これからの着実な歩みの一助としたい。

I．ペシャワールを巡る風土・政情

アフガン民族と北西辺境州

ペシャワールおよび北西辺境州の地理的特殊性は、国境山岳地帯であり、パキスタン内部での「辺境」だということである。州の面積はほぼ九州程度、人口一千万といわれ、その殆どがパシュトゥン民族（パターン人）である。彼らは独自の言語（パシュトゥ語）と慣習法をもつ部族集団で、アフガン民族ともいう。この他に、チトラール、コーヒスタン、ヌーリスタンなど、数万から数十万を単位とする少数民族集団が山岳地帯には居住している。

多数派民族のパシュトゥンは約九〇％以上で、文化・言語共にアフガニスタンと一体であり、北西辺境州という行政単位自身が英国支配時代の政治的産物である。両者は、地元住民にとっては殆ど連続したものと見なされている。事実、国境地帯の地方は「部族地域」と称し、パキスタン連邦政府は殆ど完全な自治を与えている。パキスタン内部でさえも、北西辺境州は連邦政府に対してしばしば反骨精神が盛んである。州がパキスタンより分離する現実的な可能性は当分考えられないが、パンジャーブ州優位の状態に対する強い不満が蔓延している。

パシュトゥンの一体感ということで生き生きと思い出される出来事は、「辺境のガンジー」と称せられた反英運動の闘士、アブドゥル・ガッファール・カーンの死（一九八七年没・九九歳）である。彼は最後までガンジーの国民会議派を支持して、パキスタン構想に反対し続け、生涯の大部分を牢獄で過ごし、「パシュトニスタン（パターン人の国）」の分離独立を主張し続けた英雄である。

彼の指揮するパシュトゥンのグループはかつて「赤シャツ隊」と呼ばれ、ガンジーの非暴力不服従を奉じ、英国官憲による弾丸の雨の中をものともせず整然と行進した。文字どおり同志の屍を越えて、無抵抗で敢然と進む様は弾圧側を震え上がらせたというのは余りに有名な事実である。ペシャワールの英国人統治者には発狂する者も出たという。

彼はペシャワール近郊のチャルサダの出身者であったが、「死んでもパキスタンでは葬るな」との遺言を尊重して遺体はアフガニスタン側のジャララバードという所で埋葬された。私の赴任当時、アフガン政府軍とムジャヘディン・ゲリラは文字通り死闘を展開していたにも拘わらず、戦闘が完全に停止して、北西辺境州の住民ばかりか、相互に争うアフガン人戦闘員も共にこの老闘士に最敬礼を捧げた。このようなパシュトゥンの一体感を我々はよく理解しておく必要がある。

しかし一方において、このような中央への不従順は、パキスタン政府に多くの難問をもたらすことになった。アフガニスタンの内乱に伴う難民流入を容易にしたし、麻薬の生産地としてもパキスタン政府に手をやかせている。

パシュトゥン社会とペシャワール

ペシャワールの平野部とスワトなどの盆地部を除けば、州の大半は険峻な山岳地帯か不毛の岩石沙漠で、生産性は低い。半農半牧が普通であるが、国境地帯に居住する部族は運送業（密輸）による収入が大きい。「密輸」というと聞こえが悪いが、住民の方から言えば「国境が後で勝手に引かれたから」で、密輸＝悪というのが異質な概念なのである。そもそも近代的な国家の観念が彼らの中にはない。もちろん法律も実態がない。総ては伝統的なパシュトゥンに共通する慣習法の下で裁かれる。このような傾向は大なり小なり他のアジアの農村社会に共通しているが、パシュトゥンの場合、徹底した復讐法によって互いの暴力行使を牽制しあっている部族社会という特質を備えている。

この風土は、ペシャワールでの働きを理解する上で大切で、住民の割拠対立の気風は他の南アジア地域よりも、よほど高いものと思われる。このため、インド亜大陸で「パシュトゥン（パターン人）」の名は、好戦的な征服者のイメージを伴って、一種の畏怖・恐怖心を伴って語られることが普通である。

最も普通に話されるのはパシュトゥンの母語・パシュトゥ語で、教育のある者はウルドゥ語（パキスタンの国語）もできる。ペルシャ語が国際語としては重要で、ソ連南部・アフガニスタン・北西辺境州の一部と、中央アジアでの共通語となっている。

ペシャワールはこのようなパシュトゥンの部族社会の海に浮かぶ小島のような存在で、古来より中央アジア内陸貿易のインド側の門戸として繁栄してきた。このような貿易都市の性格は今日も殆ど変化しておらず、ペシャワールに優れた国際的色彩を帯びさせている。イラン、アフガニスタンからパキスタン側へ流れて来る密輸品でペシャワールは潤っている。面倒な関税措置がないので、中国やソ連、日本、東欧・西欧諸国と、あらゆる国の製品が主にカブール経由で出回っている。種類もマッチから銃器類に至るまで多種多様である。

ペシャワールの人口は五十万から百万といわれ、北西辺境州のみならず、中央アジ

アではカブールと並ぶ大都会である。人口は大きな政治的変動や戦争のたびに膨張し、大半はかつて難民や亡命、出稼ぎで住みついたものであり、何も今回のアフガン戦争が特別というわけではない。彼らは部族や出身地別に一種のコロニーをなして定着しており、少数ながらヒンズー教徒やシーク教徒、英国支配の遺産であるキリスト教徒もいる。キリスト教徒の大半は、かつて英印軍の軍属として、あるいはヒンズー教徒地主の小作農としてパンジャーブから連れてこられた人々であるが、中には英国支配時代のエリート層として高い地位の職業についている者もある。しかし、殆どがスラム地区に住む低所得者層で、カトリックまたは英国教会系である。

ペシャワール平野は肥沃で、小麦・米などの穀類、柑橘類・すいか・メロン・ざくろ・ぶどうなどの果物、ピスタチオ・豆類・くるみ・ピーナツなども豊富に産する。

しかし、都市近郊を除けば自給自足がやっとで、農村の現金収入は非常に少ない。都市部では、一般現金生活者の収入は月給で平均一〇〇〇ルピー（約七〇〇〇円）前後であり、肉体労働者の日当が三五～五〇ルピー（約二五〇～三五〇円）程度で、ややましな中流階級でも二〇〇〇～三〇〇〇ルピーを越えない。

就学率についていえば、北西辺境州の学童期年齢の約二五～三〇％程度といわれ、それも殆どが男子である。パンジャブ州などに比べるとずっと低い。ただ、何を以て「教育」と呼ぶかは別で、将来の糧を得るための技術教育ならば家業の手伝いをしておればよいし、道徳・宗教教育ならば村のモスクを中心にイスラム的な人間教育がなされる。有効識字率は一〇％未満と思われ、読み書きができるだけで農村では尊敬を受ける。

土地所有形態

土地所有形態はその共同体の在り方を理解する鍵である。資料が少ないが、当地で確認できた一般的事実を述べてみよう。

北西辺境州の寒村では自作農が多い。地主の支配による小作制度のところもあるが、一般に小規模で、インド的な厳格な世襲的階級分化はない。ザミンダーリ（地主）と自称する者でもせいぜい数十名の小作を養っている程度で、質素である。このような自作農民と小地主群が血縁関係で結束し、おおざっぱに、家族－氏族－部族の単位を形成する。

そもそも本格的なインド的大土地所有は、英国による「徴税権」の獲得と共にインド亜大陸にもたらされたもので、土地が譲渡の対象となって少数の大地主が次々と小地主を併合し、富の独占が進行する過程であり、古典的封建社会から脱皮する農村の再編成である。この事情は江戸時代末期から明治初期の日本で見られた現象と大差ないが、インド亜大陸では英国人自身が新興地主として支配・進出し、多民族の混在も絡んで、複雑な様相を呈した。

しかし、北西辺境州とアフガニスタンにおいては、このような大土地所有を可能にする肥沃な農地は限られており、大半はそれぞれの土着小地主のミニ封建性か、古典的な領主としてせいぜい一つの盆地を治める程度に留まっていたといえる。「パシュトゥンに半人前はいない」という独立覇気の気風は、それぞれが一国一城の主という小地主制度を基盤とするもので、農村では耕作器具と並んでライフルが不可欠のものである。武士と農民が未分化で、血縁関係

の強固な古代末期から初期封建社会に、ほぼ相当すると考えてよかろう。この事情はアフガニスタンでも同じである。

北西辺境州では、このような農村社会の基礎構造に加えて、大きな盆地の封建領主制度、平野部の大土地所有、遊牧民を許容する「入会地」的な制度、大都市近郊に見られる投機的な土地所有が加わり、さらに、工業化に伴うしばしば悲劇的な、農村の分解過程が重なってくる。古代末期から現代までが、容赦なく重層的に折り重なっているのである。

ただアフガニスタンでは、内乱の影響でこの構造が根底から揺さぶられたことである。土地改革は皮肉にも革命政権によっては殆どその実を上げることなく、旧体制は戦乱と難民発生によって突き崩されつつある。

しかしいずれの場合でも、イスラム教がこの共同体を律する強固な紐帯として君臨し、社会的変動は常に宗教的装いを凝らして一層複雑なものとなる。人々の精神構造もこれを反映して、複雑な近代化の苦悩のただ中に置かれているといえよう。我々が「協力」や「分かち合い」というとき、このような困難な事情が人々の背景にあることを知らねばならない。

アフガニスタンの内乱と難民発生

アフガニスタンの内乱はダウード元大統領のクーデターによる王政廃止（一九七三年）の頃からくすぶり始め、王政復古派、急進的左翼勢力、保守勢力の抗争のうえに、伝統的な部族対立が絡んで複雑な様相を呈した。一九七七年にダウード自身も殺され、ソ連に擁立された急進的左翼勢力が権力を掌握した。

しかし、「革命政権」が強引で急激な社会改革を開始するや、たちまち伝統的イスラム社会と真っ向から衝突、「解放」されるはずの農民層自身が立ち上がって反乱は全国に拡大した。手をやいたカブール政権はソ連の支援を頼み、一九七九年十二月ソ連軍の大部隊一〇万がアフガニスタンに侵攻した。徹底した掃討作戦によって多数の村が焦土と化し、大量の難民がイランとパキスタンの北西辺境州に流入した。その数はイランで百五十万人、パキスタンで三百五十万人、うち北西辺境州のみで二百七十万人に上った。死亡者は百万人とも二百万人ともいわれる。

抵抗勢力側は北西辺境州の国境地帯に難民として逃れ、ペシャワールを根拠地として果敢なゲリラ戦を展開し、政府の支配地区をたちまち点と線に帰した。だが、少なくとも一九八五年頃までは、自然発生的な民衆のレジスタンスという健全さを留めていた。ゲリラたちの多くは住民そのものであり、旧式のライフルと敵から奪った武器で自力で抗戦していた。政治党派の乱立と権力闘争がもたらされたのは、一九八五年以後、米国の大幅な武器援助が本格化してからである。

一九八八年四月、米ソ主導のジュネーブ和平協定が成立し、頭ごし交渉に抵抗したパキスタンのジアウル・ハク大統領は暗殺された。一九八九年二月までにソ連の全兵力が引き上げて今日に至っているが、ベトナム戦争に匹敵する量の爆弾で国土は焦土と化し、アフガニスタンの農村の半数が壊滅、安定と復興にはまだまだ遠いのが現実である。

Ⅱ．北西辺境州の保健衛生事情とらいコントロール計画

一般的疾病構造と問題点

以上のような社会的事情から、おおよその医療事情は推して知るべしである。疾病の構造、その問題点は他の南西アジア諸国と大同小異である。貧困＝不衛生＝病気はここでも一つの強固な環をなしている。さらに事態を決定的に困難にしているのは富の偏在である。医療技術にしても、平均水準はともかく、現在では金を持ってカラチやラホールに行きさえすれば、欧米並に近い高水準の医療は受けられる。問題が決して「技術力の低水準」ではないことである。優秀な人材は北西辺境州にもいくらでもいる。ただこれらの人材は、一般に技術力を発揮できる欧米諸国に逃げてゆく。

死亡原因では感染症が第一位を占め、乳幼児死亡率はネパールやバングラデシュと大差ない。群を抜いて下痢症が死亡原因の第一位で、マラリア、結核、アメーバ症、リーシュマニア症、リウマチ熱による心臓弁膜症などは普通に見られる。頻回の出産、鉤虫症、マラリア、遺伝性血液疾患による貧血・栄養障害もごくありふれた状態である。（とくに女性・子供では慢性の貧血状態が多いことを我々の調査は明らかにした。血色素量の平均値は欧米・日本におけるよりもずっと低い。ゆとりのない状態では、わずかな障害が速やかに重症化しやすいものと思われる。）

大都市偏在型の医療構造も顕著で、これは日本の三〇年以上前の医療過疎の状態をさらに極端にしたものといえよう。ただ日本の場合、豊富な保健財政と交通網の整備で問題を切り抜けたが、同様の過程を北西辺境州に期待するのは不可能である。このため、州政府はＢＨＵ（basic health unit）を各村単位に配備して対処してきたが、実質的に機能しているところは稀である。たとえ意欲のある若い医者が赴いても、十分に機能する機関病院のないこと、輸送手段がしばしば困難なこと、僻地に止まることがその医師の将来に不利な事情を作り出すことなどで、実質的に機能してはいない。

予防教育・衛生状態の改善も同じく困難な問題を抱えている。これには、基礎的な教育水準の高さと、主婦の協力が不可欠である。しかし、女性を隠す習慣のある北西辺境州のパシュトゥン社会では主婦への働き掛けは至難の業である。また、これら主婦がまともな教育（伝統的なイスラム教育でさえ）を受ける機会は殆どない。

らい根絶計画における諸問題

らいは全体からすると決して大きな問題ではないが、この州の抱える保健衛生対策上の悩みをそのまま浮き彫りにしている。我々の活動とも関係が深いので、ここでは少し詳しく述べてみよう。

Marie Adelaide Leprosy Centre は、一九八五年のパキスタン全土の総登録患者数を約一五〇〇〇名と発表した。しかし、これは六年前の登録数で、その後の発見活動によって倍増しているとみられる。

病気の分布は特定の地域に集中する傾向が強い。パンジャーブ州では少なく、カラチ周辺と北西辺境州に集中している。北西辺境州では一般に山岳地帯に多発する。因みに、女性患者の割合は三〇％以下、北西辺境州では二五％である。らい対策は母子衛生上の問題でもある。

アフガン人患者も北西辺境州では大きな問題で、アフガニスタン内戦の影響で対策は大幅に遅延した。らいはまだまだ燃え盛っている問題である。

パキスタン全体の実質的ならい根絶計画の推進役は、一九五五年にカラチを中心に

活動を始めたMarie Adelaide Leprosy Centreで、州政府ベースとは言いながら北西辺境州でも技術財政共に彼らに負うところが大きい。しかし、一九八四年以来、ペシャワール会＝ＪＡＭＳが代表する日本の民間の支えが次第に大きな比重を占めるようになってきている。

らい根絶計画五ケ年計画

一九八三年に始まった「五ケ年計画」では、Marie Adelaide Leprosy Centreが実質的な主役となり、ペシャワール・ミッション病院が加わって始められた。この骨子は、公営病院の一角に開かれたらいセンターとミッション病院を基地病院とし、州の各地域三五ケ所に投薬・診療所を設置、診療員を配備してジープやバイクを与えて機動力を増し、早期発見と定期服薬を徹底しようとするものであった。この結果、登録数は過去数年の間に爆発的に増加、現在約七千名に迫っている。

Marie Adelaide Leprosy Centreは、紀元二〇〇〇年までにらい根絶をパキスタンで達成すると宣言、ＭＤＲ（多剤併用療法）を切り札として積極的に実施した。このＭＤＲは、月に一回必ずらい診療員の所に赴いて投薬を受けねばならなかったから、診療所から離れた村に住む患者には大きな負担である。

このため「在宅治療」の方針が立てられて、定期服薬の向上が図られた。しかし、山岳地帯の多い辺地では交通の便が極めて悪い。らい診療員は患者訪問に大半の時間を費やし、診療所はもぬけの殻のことが多く、来た患者が薬を受け取れず、ペシャワールまではるばる出てくるという事態も増えている。このＭＤＲ自身が様々な問題をもっているが、殆ど終生の服薬を要求されるらいにおいて、しかも北西辺境州のような医療予算の貧しい所で、やむを得ない試みではあったと言える。

こうして、「紀元二〇〇〇年までの根絶」というのは、まだまだ努力の要ることであるが、ペシャワール・ミッション病院を支援する我々としては、この積極的な面を評価して特に批判がましいことは公言しなかった。それは、この五ケ年計画が、地元政府の手による、少なくとも初めての保健行政上のプロジェクトだったからである。

「外人の慈善事業から保健行政の組織的コントロール計画へ」の新局面を開くものであったことは、いくら評価してもしすぎることはない。

らいの事業は長い。いくつもの試行錯誤は避け得ないであろう。にわか作りのコントロール計画の不備や技術的な低さを笑うことはたやすい。しかし、最も重要なことは、北西辺境州の人々自身が行政を動かして何かを始めたということだ。ミッション病院側としては、事態を静観しつつ、将来ともニーズの不変である治療サービスの改善を黙々と行う方針を採ってきた。スタンドプレーの目立つ外人宣教団体の見世物的な活動を徹底的に排除し、北西辺境州政府のコントロール計画の一歯車たることを目指したのである。

この事情は日本側はもちろん、ミッション病院の当局にさえ伝わりにくかった。病院当局の理解を得るのに時間がかかったが、こうしてこそペシャワール・ミッション病院の存在意義は揺るぎないものになった。

（以下次号）

新会則のもと 新たな出発を

ペシャワール会事務局長　佐藤雄二

去る七月二十一日、予定通り福岡市民会館で年次総会と活動報告会が催された。

今回は、JOCSから独立し名実ともに自前の活動を開始する新たな旅立ちの会であったが、風の学校の中田正一校長を特別講師に迎え、また約三百名の参加者を得て熱気に満ちた会であった。総会におけるいくつかの重要な事項について報告する。

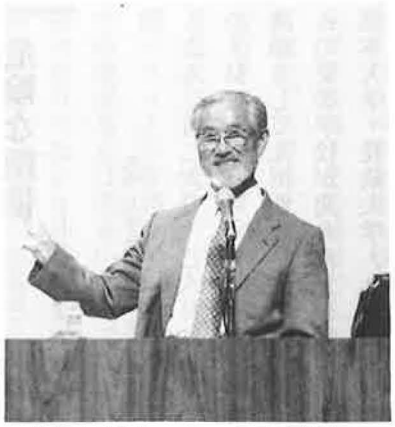
JOCSによってまかれた一粒の種

中村医師は七月末日をもってJOCSの任期を終了する。その最大の理由はご家族の事情によるもの（一つは、ワーカーは家族を同伴させなければならないというJOCSの規定があるが、中村医師のお子さんが小学校の高学年になり教育に支障が生じるようになったこと、その他）であり、JOCSとの友好関係は今後も継続される。ペシャワール会の会員の中には多くのJOCS会員もおられるが、われわれの活動が、JOCSによってまかれた一粒の種が、今のように育ってきたことを喜んで頂きたいし、今後も暖かいご支援を願う。中村医師は、これからは年に数回、数ヵ月ずつペシャワールに赴任することになる。また、これに伴って、ペシャワール会の会則にある、②本会は、「JOCSの「共に生きる」という理想に賛同し」および③本会は、「派遣母体であるJOCSを通して必要な協力を行うが」の条文を削除することになる。

ODA問題を政府だけの責任にしてはならない

次に、昨年度からODA（日本政府の開発途上国への援助金）の一部をNGO（民間の国際協力団体）支援に支出する制度が始まったが、ペシャワール会もその援助金から三百六十万円を得たことについてである。最近その使途についてさまざまな批判がなされているODAに関することであるので、事務局でも熱心な論議がなされた。集約された意見は次のようなものであった。欧米の先進諸国では発展途上国への援助金の大きな部分は、現地の草の根の人々のニーズに真に応える目的で、NGOを通して支出されている。一方わが国では、これまでは政府間での援助しかなく、本当に相手国の一般国民のためになっているのかどうか疑問視されている。しかしこれは、単に政府の責任だろうか。これまでわが国には、まともなNGOがあまりにも存在していなかったことも大きな要因ではなかろうか。このたびのNGOへの援助額はODAに占

全国各地から集まった人々の前で報告する中村医師


84歳とは思えないパワフルな中田氏

める割合は極々微小な額ではあるが、われわれ日本人の意識のレベルを問われる大きな試金石にもなりうるのではなかろうか。とりあえず、われわれの会でもらってみて、何かまずいことでもあればそのことを指摘して断ればよいのではないか。このような考えによって、ＯＤＡ資金を受けることになった。この援助金は特別会計とし、全て現地への薬品購入費と運送費に当てた。この件について、会員の皆様のご意見を伺いたい。

女性のワーカー二人がペシャワールに赴任

秋には中村医師に加えて、札幌出身で愛知国際病院に勤務されていた吉武英子医師と鹿児島出身で福岡徳洲会病院の藤田千代子看護婦が新たにペシャワールに赴任する。さらに十二月には、現在イギリスで熱帯医学を研修中の石松医師と、昨年十二月から今年の六月まで現地でスタッフの英語教育と事務処理のために活躍していただいた沢田さんも再び加わる予定である。ＪＡＭＳのシャワリ医師およびペシャワールミッション病院のウジャガー院長をはじめとする現地の協働者と共に強力な陣容が備えられることになり、これからの活躍が期待される。このことは同時に、私たちペシャワール会会員にとっても新たな覚悟が要請されることでもある。会員の皆様方のこれまでと変わらないご支援を願う。

各地の報告会から

- ●八尾ペシャワール会
- ●九州地区学生ＹＭＣＡ・ＹＷＣＡ夏季学校
- ●熊本ペシャワール会

●八尾ペシャワール会

大きな流れの中で自分を見失わないよう

八尾ペシャワール会
八尾徳洲会病院
医療ソーシャルワーカー　小藤田　浩美

去る九月二十七日、中村先生は看護婦の藤田さんを伴って、再びペシャワールに出発されましたが、日本滞在中は、三十以上に及ぶ報告会を、福岡をはじめ、名古屋・大阪・熊本など様々な場所でこなされました。その報告を三名の方に書いて頂きました。

去る八月十八日(土)八尾市文化会館第1会議室にて、中村先生の講演会「ペシャワールから海外協力を考える」が行われました。

淡々とした口調で報告する中村先生

土曜日の夕方六時からという時間にも拘わらず、五十名程度の方が聴きに来られました。

講演会当日行ったアンケートから、医療従事者だけでなく、主婦やサラリーマン・学生などいろいろな方がかなり遠方からも来られ、熱心に中村先生の話を聴いている姿が印象的でした。

定刻より遅れること数分、聴衆の入りを気にしている私の心を知るはずもない中村先生は、ゆっくりと壇上にあがり、淡々とした口調でペシャワールでの取り組みについて話を始められました。政治、戦争のこと、アフガン難民のこと、病院のこと、人材育成の苦労話等を実に淡々と……。

実は、昨年も同じ場所で先生の話を聞き、「こころの時代」(NHK)をみた私など、どんな新しい話が聴けるのかと期待しすぎていた為、昨年とよく似た話が多かったことに少し物足りなさを感じました。だけど少し考えてみると、ひとつひとつに時間をかけて現地のリズムで進められていく活動が一年で大きく変わる筈がないんですよね。簡単な事に気付いた私は、自分がこの日本という国の生活・習慣・思考にすっかり慣れていることを実感しました。

夏が過ぎ、中村先生は又ペシャワールに帰られます。来年もまた、どこかで先生のお話が聞けることを楽しみに、大きな流れの中で自分を見失わないようにと思う今日この頃です。

●九州地区学生YMCA・YWCA夏季学校

危険な関係
――アジアと日本――

九州大学医学部学生　山田　信

去る二月二六日～二八日にかけて、熊本のYMCA阿蘇キャンプ場で、中村先生を講師として九州地区学生YMCA・YWCAの夏季学校が開かれました。この集会は、熊本大学・長崎大学・九州大学、そして活水女子大学の各YMCA、YWCAが中心になって毎年夏に開かれているもので、中村先生も学生時代に参加されたことがあるそうです。今回は「危険な関係―アジアと日本―」というテーマで、四十名近くの学生が集まり、中村先生の講演を聞くことができました。

戦前・戦中の日本のアジア諸国に対する植民地支配、戦後は日本企業によるアジアへの経済侵略、そしてそれによって獲得された現在の日本社会の繁栄と豊かさ。日本社会の繁栄が、アジアの犠牲の上にしか成り立ちえないという一方的な収奪の〈関係〉は〈危険〉である。自分たちの生活のあり方そのものを見つめ直すなかから、日本とアジアとの本来的な関係を回復し、アジアの人たちと共に生きる接点を見い出そう、というのが学生たちの問題提起でした。それに対して中村先生は、自分たちの在り方を批判的、否定的にとらえるいわゆる「自己否定」の論理だけでは問題の解決に

来春にはスタディー・ツアーの話も

はならないこと、現実の中に身を置いて、問題を肌で感じとることの大切さを語られました。

日本人の悪い所は、問題を頭の中だけで考えて解決してしまった気になってしまうことで、実際にアジアの現場に出かけていって自分の感性にショックを受けてみること、そして受けたショックと自分の行動の間のギャップをいつまでも問いつづけることが重要なのだという中村先生の話は、学生たちにとっても〈ショック〉だったようです。アジアの人たちと同じ目の高さに立って、日本社会から有効な実弾をぶちこみつづけること、それでも問題を解決するには、半世紀から一世紀の長い時間をかけた取り組みが必要である、とこれからの活動の姿勢を話されて講演は終わりました。気軽に遊びに行くつもりで一度来て見ませんかという先生の言葉に誘われて、参加した学生の中から来春にはアジア・スタディ・ツアーを組もうという話もでています。

●熊本ペシャワール会

現地への関心を強く寄せる声が

熊本ペシャワール会会長　吉永　公祐

去る七月二十八日、熊本県福祉会館に中村先生を迎え「西アジアからの報告」と題し、現地からの報告を聞く会を催しました。

発足以来四年、地味な歩みをつづけている本会が、はじめて試みた一般市民の方々への呼びかけでしたが、会場一杯を埋めた参加者に係一同大いに意を強くした次第でした。

スライド上映を通して、先生が医療活動にあたっておられる北西辺境州の歴史的な経過をうかがい、ここにもイギリス、ロシアの植民地獲得競争の手段に利用され、さらに米、ソ対立の犠牲を強いられた民族の悲劇が紹介され、平和国家としていちじるしい発展を見せている日本が、今後どのような協力をすすめるべきかといった点を話されました。

会場にはじめてみえた方々が多く、興味深く先生の話に耳を傾けていました。アフガニスタン戦争後、西欧諸国の沢山の民間団体が、現地での活動に取り組みながら、基本的な取り組みの精神を忘れたばかりに、現地の人たちから嫌われ撤退を余儀なくされていると聞き、救援活動のむずかしさを知らされたことでした。今回は若い人達の出席も多く、先生への質疑の中でも、現地への関心を強く寄せる声が聞かれました。

本会でも右田さんが現地を訪ねられ、ペシャワールの地が少しづつ近くなって来ました。熊本の皆さん方の支援を心強く思っていますとのべられる先生にこたえるため、今後とも会員の増加をはかり、周囲への働きかけをさらに活発にすることを話し合い、会場の皆さんたちのご支援をよびかけてみました。

たくさんの人々の熱気あふれる会場

ペシャワール会特別総会（福岡市）
中村医師報告会（八尾市）
――アンケートより

去る七月二十一日、福岡市民会館小ホールにてペシャワール会特別総会が開催されました。今回は、中村医師の報告に加え、事務系ボランティアとしてペシャワールで七ヵ月を過ごされた沢田裕子さんの現地活動報告、および「風の学校」主宰である中田正一氏の講演という盛り沢山の内容となり、約三百名の人々が参加されました。続いて八月十八日、大阪府八尾市の文化会館において、中村医師の報告会が開催されました。アンケートで寄せられた皆さんの感想をご紹介します。

◆援助の意味を考える

＊「助けることは、助けられること」という言葉は誰が為に鐘は鳴るの詩と共にボランティアの精神を表現した言葉として、忘れ難いものになりそうです。

（福岡市　A・R　43歳　女）

＊協力、援助のあり方のむつかしさを改めて思いしりました。

（福岡市　S・M　55歳　女）

＊現地にあった援助が必要であることを再認識致しました。

（香川県　Y・S　30歳　女）

＊私自身、協力隊で三年間タイに水質検査の仕事で行ってきて、帰国一年半のところです。豊かな日本を客観的に見ています。中村先生の話された「日本への危惧」を感じています。幸せな貧乏人にあこがれています。

（宮崎県　S・O　32歳　女）

＊相手の立場に立って、国際協力するには、どうしたらいいのか現実の生活の中で、考えていかなければと思った。中村先生、中田先生方のおだやかな語りの中に力強いエネルギーを感じ、私自身元気づけられた。

（福岡市　S・K　女）

＊中田先生の風の学校を設立され、その活動は、まさにボランティア活動だと感じました。助けることは、助けられることという言葉が印象に残りました。中村先生の現地での、そこに住む人々とのふれあいから医療は始まると話され、人間社会のあり方をペシャワール活動を通して、私達に訴え、協力を求めておられると思いました。

（春日市　O・C　28歳　女）

＊日本に対する海外援助の話は、新聞やTVでも言われていることですが、フジモリ大統領をはじめ、結局行きつく所はお金の話になってしまって、する方も、される方も、それが一番お手軽で助かるのかもしれませんが、何かおかしいのではないか、とずっと思っていました。非常に、考えさせられるお話の数々を、大変ありがたく拝聴させて頂きました。

（福岡市　H・Y　27歳　女）

＊国際協力とはいかなるものか？　協力というものの意味において、今迄、自分が誤解していたことを悟りました。

（宗像郡　T・H　18歳　男）

＊今まで文字でしか知らなかった海外協力の実態を、一部分ではありましょうが知ることができました。世界を観る時に、日本人の目ではなくて地球人としての目で観ることが、これからの私達にもっと必要なことかと考えさせられました。

（八尾市　42歳　主婦）

＊海外協力という目的で看護婦という仕事を選びましたが、ワーカーとして働ける能力もなくて、何か自分にできることはと考えていました。今日の講演では、自分にできる範囲での協力、また、どういう生き方をしていくかということを考えさせられました。

（大阪市　28歳　看護婦）

＊〝海外協力〟なんだかとっても響きがいいけれど、日本の抱えるあまりにも多くの問題を解決できなくて（解決しようともしていないけど）他国の問題が解決できるのでしょうか。日本なんかに〝エラそうに何か教えてあげる〟ようなモノなど果たしてあるのでしょうか。逆に日本が学ばなければならないことだらけのような気がするんですけれど……。

（大阪市　24歳　学童保育の指導員）

＊スライドや、中村ドクターのお話を実際に聞いて、現地での様子や、ペシャワール会の活動を詳しく知ることができ、現地へ行って一緒にボランティア活動をしたいとおもっています。経済、物質的な援助だけでは何の役にもたたないということを痛切に感じました。

（京都市　23歳　看護婦）

＊日本の海外協力と言えば、金銭を送る、古着を集めて送るというものが浮かび、また、国々に送るものの、奥地には行き渡らず、一部の現地人にしか渡っていないなどの情報がある。相手の立場にたって何が必要か？　と考える講演の中であったが、講演全体の印象として、女性の人材派遣の必要性を強く感じた。

（東大阪市　22歳　学生）

＊　＊　＊

◆生き方をみつめ直す

＊心の奥深いところで何かが、めざめたような気がします。

（福岡市　N・N　女）

＊「アジアへの理解」を自分がどこまで出来るのか、考えさせられることが最近多くなりました。でも、考えるばかりではなんにも形にならないんですね。中村先生や、中田先生の怒り、沢田さんの自分への問いかけに、今日触れられたことだけでも、良かったと思います。アジアだけでなく、地球的規模で悩みは深いものです。この私の息もどこまで続くのでしょうね。

（福岡市　R・I　27歳　女）

＊自分の人生を今後どのように生きて行こうかと日々悩んでいました。今回の講演会を聴いて、先が見えてきたわけではないけれど、毎日、一日一日を、自分なりに、一生懸命過ごして、目先の事で一喜一憂するのではなく、こつこつと目標にむかって、やっていこうと思いました。今回この講演会を紹介してくれた友人と、随分前から信じて、人と接してきた事は、「人に対して、自分がやった事はめぐりめぐって自分に返ってくる。」でした。できる限りその人の立場に立って、むくわれなくても何かをしようと、やってきたものは、少しずつ自分にいろんな形で返ってきていると、再び確信できました。

（福岡市　看護婦　23歳　女）

＊私にはとてもまねのできない立派な方がいらしてはずかしいかぎりです。こんな自分を反省しています。

（八尾市　主婦）

＊日本での（頭の中の）考えが現地では通用しない。貧しくてもいきいきしている子供をみて、しあわせとは何だろうか考えた？　（岡山市　26歳　団体職員）

＊子供の頃から、アフガニスタン、パキスタン、カラコルム等は、心からときめく言葉でした。およそ医とは無縁の貧乏サラリーマンのグータラ女房をしておりますと、これらの言葉は何時までも言葉だけで現実に感じるには程遠く中央アジアの空気に浸れたらと参加させていただきました。開会までの数分「ペシャワールにて」の序章を拝読した印象から堅い話をなさるのではと想像致しましたが、普通のおばさんにとって二時間程の話が、一時間足らずだったのではと思える一時でした。有難うございました。なにかと組織化されるものが多く、その組織の上にたった表面的なものに振り回されがちな昨今、一語一語心に残るお話に今一度考える機会を与えていただきました。

（八尾市　45歳　主婦）

＊日頃考えていたことなのですが、本当に人間にとって必要なものは何なのか、本当の豊かさとは何なのかについて失うものが何もなくなって初めて人間が人間らしくなれるということを聴いて、現在人がいかに余分なものによって自分をとじこめ、小さくおびえているかということを痛切に感じました。本日は貴重なお話とスライドをありがとうございました。

（吹田市　28歳　会社員）

＊ペシャワールの難民たちが明日のことは考えずに、明るく楽しく生きているといったところが印象的でした。

（八尾市　14歳　中学生）

＊子供達との接し方を見直そうと思いました。確かに瞳の輝きを失っている、または、失いかけている子供達が多いのでいつも何とかしたいと思っていましたが、少しきっかけみたいなものができそうです。

（生駒市　26歳　学習塾講師）

＊「我々は今、どこへ流されているのか？　もう一度考える必要がある……」意味深い言葉である。もう一度自分自身考えてみたい。

（八尾市　39歳　会社員）

◆自分にできる事は

＊知らないことが、たくさんありすぎる、同時にすばらしい人々がたくさんいらっしゃるのだということを痛烈に感じました。日本では、もう重要とされなくなった技術や知識、そういう考え方自体がただの日本風であったこと、なんだかはずかしいです。自分でも出来る限りのことをやりたい。もちろん、実際にいろんな作業に加わることもそうだけど、広告という仕事柄、報道という面でお手伝いしたり、やれることからやっていきたいです。

（太宰府市　I・T　25歳　女）

＊中田先生のお若い様子に感心しました。中村先生のお仕事は以前から新聞、本で読んで大変興味深く思っておりました。私は大学を卒業して10年余り、平々凡々と毎日診療をしておりますが、現在の日本の高度先進医療に大きな疑問を感じてきました。今後、後衛として協力したいと思っております。

（福岡市　T・M　37歳　男）

◆伝えてゆきたい

＊まだまだ知らない現状を少しでも多くの日本人に伝えることが、中村先生のおっしゃった靴を作ることにあたるのかもしれません。これからも頑張って下さい。

（福岡市　T・T　27歳　男）

＊今日の講演会の話を、子供達に話して聞かせたいと思っています。

（八女市　S・B　34歳　男）

●ペシャワールへ赴く藤田千代子さん（福岡徳洲会病院）に聞く

マザー・テレサと中村医師に触発されてペシャワールへ

ペシャワールで二年間ボランティア・ワーカーとしての任に就くため、去る九月二十八日福岡徳洲会病院の看護婦、藤田千代子さん（鹿児島出身）が現地へと発たれました。出発に先立って、現地で働こうと決心した動機や旅立ちまでの経緯などについて、藤田さんにお話を伺いました。

◇

――藤田さん、まずどういう経緯でペシャワールへ行こうと思うようになられたのか、その辺のところからお話を伺えますか？

もう何年も前になりますが、看護学校に入学したての頃に、学校でマザーテレサの映画を見る機会があったんです。その時初めてスラムで死にゆく人々の為に働くマザーテレサの姿を見て、自分もいつかその様な仕事ができればいいなと漠然と思うようになったんです。それからずい分と日が経って今から二年前位、中村先生が夏に帰国なさった時に徳洲会病院でお話をなさったんです。その時に、マザーテレサのなさってることに近いなという風に感じました。しばらくして、先生に連絡を取ろうとしたんですが、先生はいらっしゃらなくて、その時は沢田さん（当時、現地へ事務担当のボランティアとして赴いていた）と少しお話をしたんです。で、とにかくファラ・ハウス（ペシャワール会事務局）へいらっしゃいという事で来たのが、丁度石松先生が帰国なさってた時だったんです。

元気に出発する藤田さん

――今年の一月末頃ですね。じゃあ、ペシャワール会とのかかわりもその頃からなんですね。一月から今まで八ヶ月位しか経ってない訳ですが、その間にパッと決心なさって……。

というか、中村先生のお話を聞いた直後に、そういう仕事をしたい人は病院へ申し出る様にという事で申し出ていたのですが、なかなか話が進まなくて、もう個人で行こうと思って連絡を取ったのがこの一月だったんです。

――一度は徳洲会病院をやめて行こうと思ってらしたんですか？

はい、一月でやめて行こうと思ってたんですが、石松先生が今からは暑くて何もできないから、できれば勉強してからいらっしゃいということで……。

――結局、病院は休職ということで行けることになったんですね。今、病院ではどちらの科にいらっしゃるんですか？

五月から七月末までは院内研修という事で外科系の研修をさせてもらって、八月の一ヶ月間は岡山の巴久光明園で〝らい〟に

ついての研修を受けてきました。

――ペシャワールへも一度いらっしゃったんですよね？その時はどんな感じでした？

はい、三月に下見ということで二週間ほど行きました。その時初めて〝らい〟の患者さんに会ったんですけど、日本では何か暗いイメージを持っていたんですが、向こうの患者さんは明るい感じでした。でも医療は足りてないという印象でした。特に宗教の関係で、女性の患者さんがあまり看護されていないという面を強く感じました。ある女性患者さんなどは寝たきりだったので排泄はどうなってるのかと気になって見てみるとたれ流しという状態でした。スタッフが男性ばかりなので、下の世話などとんでもないという感じでした。

――向こうへ行ってこれだけはやっておきたいという事はありますか？

やっぱり、女性の患者さんの看護を行き届かせたいという事ですね。

――言葉はもちろんですが、水とか食べ物とか不安はありませんか？

はい、水はちょっと心配ですけれども、この前行った時は運よく下痢もしなくて、二キロ肥って帰ってきましたので……。男性はたいてい、ひどい下痢でやせて帰ってこられるみたいですけど……（笑）。

――あの、出発直前になって先日（八月三十日）お父様がお亡くなりになったそうで、いろいろと迷いもおありだったと思うんですが？

はい、母にも泣いて止められました。父は私が行く事にはずっと反対で、二年位説得し続けてつい最近電話した時にやっと許してもらったところだったんです。父も長い間心配し続けてやっと許す気になってくれたんですから、ここで私が行かなかったら却って父に申し訳ないという気がするんです。そういう事なども家の皆とも話して、じゃあ行ってきなさいという事で……。

――お父様が反対なさってたのはどういう理由で？

父は政治経済やああいった国の話などが好きで、ニュースなどもよく聞いてたようです。それだけに心配する気持も強かったのだと思います。私は大変な父親っ子だったので、何もお前が行かなくともと……。三月に下見に行った時も実は内緒だったんですが、結局ばれてからは私から現地の話を聞くのを楽しみにしていたようです。八月の研修が終わったら鹿児島に帰ってゆっくり話すからねと言ってたんですが……。

――結局、お父さまには会わずじまいだったんですね。

ええ、それだけが心のこりなんですが……。でも、生きている間に許してもらって本当に良かったと思います。

◇

最後に、サワダ女史による藤田さんの三月の滞ペ中のエピソードをひとつ。彼女がペシャワールに着いて間もない頃、現地のスタッフや患者さんとは殆ど言葉の通じない藤田さん一人を残して日本人スタッフ全員が出払う事になって、留守中さぞ心細い思いをしているだろうと気が気でない沢田さんが急いで帰ってみると、藤田さんは意気消沈しているどころか、どこからか見つけてきた棒切れの先っちょに布を巻きつけてペシャワールのネコを相手に悠然と手玉、じゃなくて玉をとって遊んでいたとのことでした。

どこででも遊べる藤田さんは、やっぱり大物!?　ホダーフェス（ご無事で）!!

私の貧しい能力において最大限に役に立てるところで生きてみたい

札幌里塚病院医師　吉武英子

もし、また送別会をしてもらいに福岡へ来ることができれば嬉しいねといって博多を去ったのが初めてペシャワール会に来た今年の三月。それ以来、夢のように時がすぎ、いよいよ送別会をしてもらいに四回目の福岡へ行けそうです。

海外医療協力をめざし愛知国際病院へ

はじめまして。自己紹介をさせて頂きます。今回、ペシャワール会の御好意と周囲の励ましと諦め（？）に支えられ、ペシャワール・ミッション・ホスピタルへ行くことになりました。北海道小樽市に生まれ、育ちました。三十二才で幸か不幸か独身です。札幌医大を一九八三年に卒業し、外科に入局しました。その後大学で実験をしたり道内の市立病院、肛門科専門病院（どうぞお悩みの方は気軽に御相談下さい）で勉強し、すばらしい先輩と出会いました。

昨年、海外医療協力をめざし、初めて北海道を離れ名古屋市隣り町にある愛知国際病院に来ました。去年はとても暑く辛い思いをしましたが、今年はずるをすることを覚え、去年ほど辛くはないので慣れたのだなあと思います（ズルをするのも慣れのうち）。先日福岡でウジャガー先生（ペシャワール・ミッション・ホスピタル院長）とお会いし、一応二年間働かせてもらうことになりました。夏には休暇を頂くようお願いし、この間、札幌の病院へ帰ります。ペシャワールにいる間もこの札幌里塚病院（開業医）に所属しますが、この病院の寛容で暖かい理解と協力には頭が上がりません。

明るくサッパリとした吉武さん。
その"誠実さ"は万国共通です。

ペシャワールでの生活は少なからず不安

趣味は散歩で山も海も街もよく歩きます。音楽も大好きでウォークマンを聞きながらよく散歩します。またお酒をのむことも好きです。このような趣味や暑さに弱いことを考えるとペシャワールの生活は少なからず不安ですが、何とかなるだろうと呑気にしています。（お酒はヤミでどうにか手に入るだろうし、レコードはテープに吹き込んでいます。）長所はあるのかないのかよくわかりません。欠点はどちらかというと感情的で、あまり思慮深くないので常に忠告してくれる人が必要です。また単純でガンコときているので最悪です。

最大限に役に立てるところで

さて、私のペシャワール行きに至るまでの考えを書いてみます。私が行くことを知ると周囲の人は驚きと関心を示してくれます。また私も自分の意志を表現せざるを得なくなり、同時に話しているうちに自分でもそうだったのかと変に感心することがあります。ある日、虫垂炎の手術の最中に私のペシャワール行きを知ったある先生が、

「『青春をなげうって』いくんだね」

と言われました。

「私の場合はそんな悲壮なものではないんです」

と答えましたが、よく考えてみるとむしろ青春を求めに行くのではないかという気がします。私はどうせ医者になったのだから、私の貧しい能力において最大限に役に立てるところで生きてみたいと思ったのが始まりです。

以前、ある海外協力に関する偉い先生が「日本がいやだから海外へ行くというのではだめだ」と忠告して下さいました。でも私の場合は、ある意味ではこの禁忌(タブー)を犯しているような気もします。超高度な医療が注目され、また年老いても楽に死ぬこともできない日本。それが良いことか悪いことかはわかりませんし、私のレベルを超える問題です。でも私の場合は自分にできるもっと初歩的な医療で多くの人に喜んでもらいたいと思ったのです。

ブカッコウで誠実で

また、これは私の好みですが、カッコよく生きれる人にも憧れますが、貧しくブカッコウでしかも誠実に生きている人が好きで尊敬します。たとえば、以前 study tour でネパールへ行ったときに見た、裸足で重い荷物を背おって歩く人々。日本でも街角で働く丁寧な靴磨き屋さん。駅の床のチューインガムをけずってくれる人やひたすら草刈や掃除をしてくれる人々、背中を丸め泥だらけになって畑で働く老夫婦 etc etc.——

ただ私のような立場からこう言っても彼らの苦労を知らずに無責任に言っているようで申し訳ないと思いますが——。とにかくこういう人々が好きで、そういう医療が好きで、私にできる喜んでもらえること。これが私の理想であり、これを求め今のところ生きています（というと少し大袈裟かな）。

そうなんでないかな、と期待しつつ行きます

ペシャワールはまだ行ったことがないので、正直なところ私がどう生きていくのかわかりませんが、きっとそうなんでないかなと期待しつつ行ってみようというわけです。しかしふり返ってみると、これはかつて私が外科を選んだときと似ています。私はもともと手術そのものよりも外科の患者さんが好きだったので、自分の能力に対する不安や周囲の親切な忠告にもかかわらず「後悔するよりは」と考えたのです。でもお陰ですばらしい人々と出会うことができました。

というふうな具合で誤ちや喜びを味わいながら今まで生きてきました。きっとこれをお読み下さった方は（自分も含め）こんな人で大丈夫なんだろうかと思われるでしょうが、まずは二年間行ってきます。御迷惑をかけないよう努力してきます。どうぞ今後ともよろしくお願いします。

1990・9・12　仲よしがつんでくれたイチヂクを食べながら。

荒削りの優しさの中で

ペシャワール会事務局　沢田裕子

＊

二十三号で現地から元気な様子を報告してきた沢田さんが福岡に戻ってきました。慣れない土地での苦労より、むしろ、ペシャワールでエネルギーを充電してきたような感さえ漂う彼女に、七カ月の生活をふりかえってもらいました。

＊

●苦しかった行動制限

七カ月のペシャワール滞在から帰国して二ケ月余り。未だに帰国後の気持ちをひとまとめにするのは容易な事ではありません。外国人として、かなり守られた環境に暮らしたとはいえ、やはり今までに経験したことの中で最も異質であり、困難なものでもあっただけに一言で印象を語るのは不可能な気がします。

極端な寒暖の差、激しい乾燥、厳しい夏の暑さ等の自然的環境の苛酷さもさることながら、女性に課せられる様々な行動の制限は最も苦痛な経験でした。また敢えて外出する所も特にないため、運動不足にも悩まされました。現地の女性はこういう暮らしを一生続けるのですが、一体、私には想像しようもありませんでした。

それでも「順応する」という救いが人間にも残されているものです。しばらくするとそのような環境にも、単調な毎日の暮らしにも慣れ、今までの物や情報にあふれた社会で必然的に起こる「欲望」から解放された、と救われたような思いさえした程です。

●JAMSスタッフとの関わり

どうしても閉ざされた人間関係の中で生活していくことになるのですが、それでもJAMSのアフガン人スタッフとの関わりは、私にたくさんのことを残してくれました。時にもどかしい程の彼等の礼儀正しさ、他人をおもいやる心は、アメリカ滞在で個人主義を中途半端に身につけてしまっていたらしい私を何度もハッとさせました。門

JAMSの庭でスタッフ達と

JAMSのスタッフの婚約披露宴にて
後列は、大分の石松さんを支える会の吉富さん

番さんやドライバーさん達、いわゆる「教育」を受けていない彼等の荒削りな、でも暖かい優しさ、魅力的な表情は今でも鮮明に思い出すことができます。学校を中途でやめてペシャワールに来、JAMSで働く十八、九の少年たちのあどけなさの残る笑顔に、本来ならば好きなスポーツでもやって無邪気に過ごせる時期なのに、と胸がつまる思いもしました。なかでも私の英語の授業に一番熱心だったヤヒャは大人の男たちが周りにいる時の控え目な礼儀正しい態度と私といる時の子供っぽい表情のコントラストが印象的で、アフガンの男子への厳しいしつけが伺えたものです。私の帰国前日「誰にもいわないでね」と、彼がくれたアフガンの腕輪は私の大切な宝物です。

●祖国アフガンへの思いを感じて

彼等の誰ひとりとして家族が全員無事であることなどないことを知ったのも、アフガンへの強い愛着と誇りを肌で感じたのも彼等との様々な話を通してでした。そんな風に打解けていくうち、かれらの誰もが何年もの間祖国を離れていなければならない現実を思ううち、いつの間にか私は、「もう一度ペシャワールに戻ってきたい」と口にしていました。これはどうしようもないことなのですが、日本に帰ってしまえば私にとっては終わってしまうこの現実も、彼等には延々と続いていくものだと思うと耐えがたい思いがしてしまったのです。

●射るような視線さえなつかしく

七カ月振りの日本は、物があふれ情報があふれ、人々は着飾って妙に取りすまし、私は自分の納まり場所を失ったようで、おせっかいに近かったペシャワールの人々の親切が、屈託のない笑顔が、外出時の私を射るように見つめる、好奇心を隠さぬ真っ直ぐな視線すら懐かしく思える始末。けれどそんな日本に舌打ちしながら、もう一度ペシャワールで暮らすことに「大変だなあ」と、心のどこかがもう迷い始めたりして、ちょっとした混乱状態が今も続いています。

仕事に関して言えば、今回はその時々の対応で精一杯で、何もシステムのようなものが残せなかったこと、そして、会計を握っていたため、どうしても私が「力がある人」という誤解を与えはしなかったか、という自問と後悔が残っています。日本人はスポンサー兼指導者、現地のスタッフはただ従えばいいという形は心情的にも慎まねばならないし、あのような特殊な土地柄では、現地の人々の勘に頼らずには物事は進まず、不合理でもあるでしょう。

この二つの後悔を少しでも軽くするために、十二月になったら、やっぱり私はペシャワールに向かうのだと思います。そしておそらく、今回が最後。居ると居ないとでは、医療関係者の方々の負担が大違いの事務の仕事。後に続いて下さる方の出現を心から期待せずにはいられません。

中村哲著『ペシャワールからの報告』を読んで――樋口伸子

大らかな生と死

有名予備校での講演をもとに編まれた七十五頁の冊子であるが、その内容は前著『ペシャワールにて』と同様に深く豊かである。

現場からの報告には、活動の目的である「らい」治療のことはもとより、パキスタン北西辺境州を構成する複雑な民族のこと、イスラム世界のこと、アフガン戦争の傷跡や難民のこと、など多くの問題が平明に語られている。さらに、その複眼的視点によって日本のありようが足元から照らし出される。

医学の進歩と人の幸せ

読後に、微かな羨望にも似た思いが身をよぎるのに私は少し慌ててしまった。医療過剰ともいえる私達の国から医療過疎の地を思えば、病気、貧困、戦乱の後遺と、どれをとってもその状況は厳しく困難でないはずはない。にもかかわらず、ペシャワールが私達の向かいつつある閉塞的な袋小路に希有な薫風を吹きこむ思いがするのはどうしたことか。

その鍵は、現地の人々の「大らかな生と死」にあるように思える。私達の身辺から急速に失われているものが、ペシャワールの厳しくはあるが緩やかな時間の流れのなかで息づいている。それはもちろん、現場に即した活動を通して一歩一歩切り開いてこられた中村先生と内外の支援スタッフ、それから患者さん達との交流の信頼関係を抜きにしては考えられないものであるが。

この三年間、私は業務の一端として新聞記事の切りぬき整理をやっていた。学術研究の分野を対象としていたのだが、圧倒的に多いのは臓器移植をはじめとする医学関係と、遺蹟発掘の記事であった。文化、文明の流れと関心が、遠く埋もれた時代と最新の医科学という両極に集まるのを興味深く思った。

最近ではあらかた掘り尽くされたのか、新聞の上では考古学ブームも幾分下火になった。一方の医療記事は、載らない日はな

ミッションホスピタルで患者を診る中村医師

いほどに増え続けている。切りぬきながらよく思ったのは、これほどの医学の進歩が、そのまま人の幸せにつながっているのかということだった。時おりのアンケートでも、ただ呼吸をしているというだけの延命を望む人は少ない。医者自身ですらそうではなかろうか。

衣食足りた時代に、中流幻想であっても何とか「よく生きた」と思える人々にとって、あとの最大の望みは「よく死ぬ」ことである。そして、その大半の人が設備の整った病院で最高の医療を受けることだけが「よい死」ではないと感じ始めている。最新医学の対象が人間ではなく病気のみであるような不安からくるものだろう。

健全な死の消滅

このような危惧を、中村先生はペシャワールと日本の対比のなかで、「健全な死の消滅」という言葉で語っておられる。

「ペシャワールに行くと、まず感激するのは、変な話ですが、ああ人が死んだ、と生々しい感じがいたします。もちろん、われわれは助けるために行っているわけですが、やむを得ず死ぬ場合もあります。その場合は、歩ける人がみんな病棟から出てきて、ワンワン泣き出します。」、「それから、『もうだめです』ということを前もって言いますと、すぐ連れて帰ります。日本人流に言うと、畳の上で死なせてあげたいと。皆に取り囲まれて……これこそが、人間の死という感じがいたします。」「平均寿命をやたらに伸ばすのが医療ではない。そういう、生きるということ、それから死ぬということの生々しさというか、人間らしさというようなことを、まず考えないと……」

医療の中心は、科学上の生命と病気ではなくなによりも人間であるということを、身を以て実践しておられる人の言葉として聞けば、おのずとその深意も胸に響こう。洋の東西を問わず、かつて予防の第一は隔離とされた「らい」の患者さん達が、ここでは想像以上に自由に出入りをして、生き生きと暮らしていることに救いを見いだす。時には喧嘩もしながら、大らかな生と死を共有しようとされる中村先生の真摯で温かい人柄と医療スタッフの協調が、話の随所にしのばれる。

シェアの持つ意味

ペシャワール会の信条は「共に生きる」という精神であって、それは従来の海外援助活動に欠けていた部分である。苦も楽も分かちもつということは、誰にとっても容易ではない。英語のＳｈａｒｅには、この「共有する」、「分かちもつ」という大切な語義があるのだが、私達の国でシェアといえば、先ず「分け前」や「市場占有率」などの経済用語として流布しているのも象徴的なことである。

この講演が、学歴経済エリートの入口にかかる予備校生に聴かれたのは、特に意義深い。本の最後には、過不足のない解説もあり、本当は問われるばかりの一読者会員が書けることなどないのである。

播かれた初めは小さかった命の種が遠い地に芽生え育って、いまこの国にも少しずつ枝を張ろうとしている。

（詩人・ペシャワール会会員）

＊『ペシャワールからの報告』は河合ブックレット（河合文化研究所）のNo20として刊行されている。

ウジャガー夫妻 日本で交流の夏

――ミッション・ホスピタル院長、各地を訪問――

ペシャワール会事務局　沢田裕子

酷暑の日本でのウジャガー夫妻の熱い活動ぶりを、案内役を務められた沢田さんにレポートしてもらいました。あわせて英文（夫妻のために）を掲載いたします。

中村先生の活動の本拠地であるペシャワールミッションホスピタル病院院長ご夫妻が七月二十五日より八月二十一日までの約一ケ月間、日本を訪ねられました。四年に一回開催される世界クリスチャンドクター会議が今年はソウルで開かれたため、その会議に出席されたあとウジャガー院長には七年前の名古屋訪問以来、奥様には初めての日本訪問となられた訳です。日本は例年にない酷暑でしたが、ペシャワールの夏に慣れておられるお二人は、暑さにあえぐ案内役を横目に福岡・長崎・岡山・広島・奈良・大阪・京都・東京と精力的に日本を満喫されました。

広島原爆ドームの前の院長夫妻

ペシャワールとは全く異なる日本の風物・文化・食べ物・片言の挨拶まで、知的好奇心も旺盛に吸収される一方、各地でミッション病院の活動をスライド入りで紹介・講演頂くなど、双方の交流に大いに貢献しておられたご夫妻でしたが、帰り際の福岡市内から空港への道すがら、「パキスタンが発展しない理由のひとつは女性が社会進出をしないからだ。（日本の）これだけ多くの女性が労働力となって働いているのを見ていると、つくづくそう思う」と言われていたのが印象的でした。

「僕はね、ナショナリストなんだよ」と、ミッション病院で幅をきかせていた欧米人勢力を追い出した時のエピソードなど苦笑を交じえながらの話の中に感じたウジャガー先生の、ペシャワール超少数派のクリスチャンとして、また、欧米系ミッション病院のパキスタン人院長として意地を貫き通して生きてこられたその強烈な個性は、今年の夏のぎらつく太陽光線とともに、二週間ご案内させて頂いた私の胸に、今も鮮明な印象を残しています。

「日本のお辞儀が好きだ」という言葉と日本への好印象を残していかれた奥様と、

DR. & MRS. UJAGER ENJOYED THEIR VISIT TO JAPAN

When we were having an unusually hot summer in Japan, we also had "hot guests" from Pakistan.

Dr. Ujager, Medical Superintendent at Mission Hospital Peshawar(MHP), and his wife, also Doctor at MHP, visited Japan from July 25 to August 21 after they attended the International Christian Doctors' Conference in Seoul, Korea.

In spite of the heat throughout the nation, Dr. & Mrs. Ujager seemed to have fully enjoyed their stay in Japan meeting varieties of people, who are associated with Dr. Nakamura's activity in Peshawar, in many cities such as Fukuoka, Nagasaki, Okayama, Kyoto, Tokyo, Osaka and so forth. They also gave some speeches on their works at MHP or on the life in Pakistan itself and made their audience more informed about Pakistan. At some mettings, they were pleased to have many questions and enthusiastic interest in their activities in Peshawar.

We are very happy to have had this opportunity to meet Dr. & Mrs. Ujager and believe that our bond through Dr. Nakamura's medical cooperation has been much more strengthened and their visit to Japan has left us a lot more than just knowing each other.

We hope they made a safe trip home and best wishes to their family and important work in Peshawar. Dr. & Mrs. Ujager, "Thank you for coming" from all of us.

We also thank every person who contributed his/her time and energy to welcome Dr. & Mrs. Ujager. We appreciate your help and kindness you showed during their stay in Japan.

ウジャガー院長の今後益々のご活躍とご健康を心よりお祈りいたします。

最後に、ＪＯＣＳ関西ならびに東京、邑久光明園、徳洲会病院、その他、各地でご夫妻のお世話を頂いた方がたに誌面を借りまして心より厚くお礼申し上げます。炎暑の中、本当に有り難うございました。

事務局主催の歓迎会で挨拶されるウジャガー院長

●事務局だより

＊中村先生のこの夏の現地報告会も、全国三十か所以上で行われ、たくさんの方々がその報告を聞かれました。また、福岡での総会には、遠方の方を含め三〇〇人近い方々の参加で、アジア各地で手掘り井戸の指導をされている中田正一先生（風の学校主宰）の八十四才とは思えないパワフルなお話もあり、参加者に感銘を与えました。中田先生ありがとうございました。中村先生ごくろうさまでした。

＊中村先生は看護婦の藤田さんを伴って九月二十七日にペシャワールへ赴かれました。今回からご家族を日本に残しての赴任となります。また、十月末には女医の吉武さんが、現地に赴きます。十二月には英国で熱帯医学研修中の石松先生が復帰し、事務系ボランティアの沢田さんも再度現地入りします。こうして見ますと、中村先生の実践に触発されて続けられてきた小川のような活動が、ゆっくりとより大きなうねりになってゆきつつあるように感じられます。

＊今回の藤田・吉武さんの派遣については、特筆すべきことがあります。それはお二人とも、それぞれ福岡徳洲会病院、札幌里塚病院に籍をおいたままの派遣ということです。大分へつぎ病院の石松先生もそうですが、日本の現状を見るとき病院側のＮＧＯ（民間海外協力団体）に対するこのような理解は極めて稀なことです。巷を見渡すと、海外協力や国際交流の声ばかり喧しく、その実態をみるとお祭騒ぎのイベントをやるしか能がない（ああ、広告代理店ばかりが繁昌している！）、というお寒い状況で、不景気になれば全ては元の木阿弥以上の怖いことが起こりそうです。そんな中での各病院の実のある支援体制には頭が下がります。

＊今号より会報の第三種郵便物認可がはずれ普通郵便物扱いになります（従来はＪＯＣＳの「みんなで生きる」の別冊扱いで第三種認可）。またこれを機会に表紙の一新をはかりました。これまで素晴らしい絵を提供して下さった山田純子さん、ありがとうございました。今号からの表紙絵は、この二十年アフガニスタンに通っていらっしゃる画家の甲斐大策氏が、装幀は装幀家の毛利一枝さんが、快く引き受けてくださいました。甲斐さんは、「ペシャーワルの猫」、「命の風物語」、「シャリマール」（トレヴィル社）という優れた文学作品もお書きです。お二人のご厚情に感謝いたします。

＊ペシャワール会も新たな旅立ちです。会員の皆さまの更なるご支援をお願いいたします。

〔訂正とおわび〕前号十二頁「ペシャワール会一九八九年度会計報告」中「特別会計・支出の部」の金額が間違っておりましたので、おわびして訂正いたします。

1　医薬品二四〇万円→二八一五四一四円
2　同輸送費八〇万円→七八四五八六円

〔お願い〕当分の間、郵便振替と手紙は従来通り福岡ＹＭＣＡ内ペシャワール会宛でお願いします。

（〒810 福岡市中央区天神一丁目10－24 福岡三和ビル4Ｆ 郵便振替 福岡9－6559 ☎七一一七四一〇）

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ
中村 哲著　四六判上製二二〇頁　一、五四五円
ペシャワールにて
――癩そしてアフガン難民
石風社（せきふうしゃ）
福岡市中央区大名一－二－十五
電話 〇九二（七一四）四八三八

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
④会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
役員の改選は毎年総会にて行う。
⑧毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
⑨本会の事務局をＦＡＲＡ ＨＯＵＳＥ（〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇－二五 上村第二ビル三〇七号 ☎七三一－二三七二）内におく。

発行所●ペシャワール会　〒810 福岡市中央区大名1丁目10-25 上村第2ビル307号　毎週水曜日夜七時例会
☎・FAX (092) 731-2372　郵便振替 福岡9-6559
発行年月　1990年10月30日　No.25　事務局長 佐藤　雄二